

沖

3  
2023

発行所：1137



# ベレー帽

能村 研三

## 俳句を寝かせる

「俳句は寝かしたほうが良い」とよく言われる。しかし、ひと月の何回もの句会に出句するにはそんな悠長なことは言っていられない。

締め切りギリギリになって作っている俳句ではろくなものにならないのは明白である。

本来なら、句を作って最低二日以上寝かせてみる必要があるのかも知れない。作ったばかりの句であると、まだ自分が作り手の目線のままで読んでしまつて、客観的な視点で見ることが出来ないからだろう。

たとえば、眠気が覚めて一晩中さんざん考え尽くした句が翌日なつて読み返すと、恥ずかしくて情けなくなることもある、これは、句を読み返しているときには、作っていたときの高揚感が無くなっているからなのだ。

自分の作った句を今度は「読み手」として、客観的に読み返してみることが必要なだろう。

かつてこの欄で「俳句醸造法」とい

裸木の瘤は気骨を露にす

咳止むを待つて指揮棒降り下ろし

くづれくる一波ごとに冬ざるる

年忘れ仕切り納めの人ひとり

年の夜の余りし墨を地に吸はせ

翼張る海鵜十字の淑気かな

風花や火色の欲しきわが詩囊

端正な孟宗の節淑気満つ

春隣師系はなべてベレー帽

検眼表上・下・右と春を待つ

文章を書いたことがあつたが、ときどき、糠床に手を入れて、かき回しながら、発酵、熟成させることが出来る余裕を持ちたいものだ。

吟行などで、素材に対して記憶が鮮明なうちに、ノートに書きとめるが、登四郎は吟行の時も殆ど句帳を持たなかつた。「見たものや風景を頭の中に刻みつけて帰り、一、三日してから思い出して作る。だから」見た瞬間句になつたと言う例は少ない。「素材より表現」と言っている。

「推敲」という言葉があるが、作り手の自分を一端離れて、一人の読み手となつて句を読んでもることが必要なのだと思ふ。

今年こそ、少し余裕をもつて「俳句を寝かせる」ような句作りに専念出来ればうれしいのだが。

能村 研三

元朝の怒濤の飛沫浴びに行く  
寝返りをして初夢に逃げらるる  
暇人の鳩に御慶を申さるる  
スポーツカー車庫に眠らせ雪籠  
振り返る山に猟銃音二つ  
しんがりは栗鼠にかまくる探梅行  
冬銀河言葉持つゆゑ傷つけり

季語の「野焼」「山焼」と言えば管理下で行われる感じであるが、「野火」は少し違う。登四郎先生の「野火追ひて走りし夢をいまも見る」という御句には、懐かしい思い出が蘇る。昔は野火を付けて遊んだことがあり、ちよつとした炎の色や形に見惚れ、火の奔る姿に見とれた。そして仲間が一人二人いると心強くなり冒険をした。思わぬ風に煽られた火が枯れ草から藪に回り、びつくりして慌てふためくこともあった。幸いその時は行く手の小川に助けられたが、棒で叩くだけでは消し切れず、着ていたものではないて上着をぼろぼろにしたこともあった。火は当然恐ろしいものであるが、小さい火には親しみのような温かさがある。子供の頃、焚き火があれば大人の中に交じり、冗談を聞いたりからかわれたりして笑い合った。それが大人への成長の階段だったのである。

## 濤声集

天与の雨

千田百里

合唱のぐいと闇押し年明くる  
夫の座とわれの座そして仏の座  
身支度の帯に寒気を締め込みぬ  
凍て尽す滝の安堵の姿かな  
\*待ちて天与の雨や御降りとぞ呼ばむ  
わが辞書に老残のなし冬の虹

天地の開く

辻美奈子

初日さす天地の開くひとところ  
年新た雄松はいつの日も寡黙  
\*星々を虚空へ放ち寒波来る  
荒星や昴は空の泉なす  
老酒の壺佐助の白ひとつ  
さだかなるかたちを持たず冬の川

# 蒼茫集

雪の音

大畑善昭

裏声も効かせて夕の虎落笛  
降り出して見る見る尺余屋根の雪  
\* 雪の夜は雪の音聴き眠らむか  
丹田に力を入れて雪掻きは  
雨二夜かまくらいたく瘦せてをり  
大寒の孤峰のひかり薬師岳

垂直

荒井千佐代

\* 垂直に火箸突き刺し狩の宿  
牡蠣打女坐して膝ぬれ胸乳ぬれ  
海鼠捕り戻る仏頂面をして  
闇汁会手を握られてしまひけり  
初日受く殉教・被爆の地に生まれ  
遅れ来し賀状に深き言葉あり

光 芒

細川洋子

去年今年静かに空気清浄機  
潮騒の地球くしけづる初日の出  
新玉の光芒海へ降り止まらず  
赤子追ふ赤子の視線福寿草  
少しづつ骨の減りゆく霜柱  
\* 湯冷めして部屋の奥行長くなる

猛吹雪

小野寿子

\* 猛吹雪天なく地なく我もなく  
吹雪くなか白一色といふ畏れ  
あとさきは風と雪あるばかりなり  
雪ぶとりしつっ道なき道ゆくも  
吐く息を大冬帝に奪はれさう  
雪中にやうやく現れし人の跡

# 飛鷹選評



能村 研三

短めのことば生き生き年の市

吉村さよ子

昔は大晦日まで、新年用の品物を売る市が社寺の境内などに盛んに立ち、買い物客でごったがえしたようだ。河合會良の句に〈押合を見物するや年の市〉という句がある。今の時代だと東京のアメ横のようなところを思い浮かべたらよいのかもしれないが、景気のいい売り声に誘われて、あれもこれもと少しずつ買ってしまふ。売る側も忙しく行き交う客に対して、長いことばより威勢の良い短めのことばを、生き生きと囁き立てるような口調で喋り続けている。

威をはりて寂しがり屋の鏡餅

中谷 恭子

この句、上五で「威をはりて」と言うから、近年の鏡餅の様なパックに入った小さなものではなく、床の間に飾る本格的で立派なものだろう。飾り方もいろいろあるが、白木の三方の上に裏白を敷いてのせ、上下の餅の間に昆布を挟み込んで供える。この句、鏡餅の擬人化が面白い。堂々と床の間に据えられた鏡餅も、部屋から人が去り電

気を消されると途端に寂しくなる。威を張っていても本当は寂しがり屋なのだろうか。

少しだけ負荷かけ生きむ去年今年

有井千枝子

去年と今年の境目が来ると、来る年は何事も今年より少しでも前向きに進みたいという思いがつのる。それは、今年より少しだけおのれ自身に負荷をかけて生きていけなければならないと思った。来る年が良い年になるように祈りたい。

沖見るは母恋ふに似て冬うらら

西井薫美子

人は疲れた時や悲しい時、苦しかった時に海を見に行く。しばらく沖を静かに眺めていると次第に心のなかに溜まっていたものが洗い流され、また生きていくエネルギーが湧いてくる。まるで、母を恋う気持ちのようだ。

数へ日や今日やることは今日の分

長山 正子

新しい年まであと何日と数えるから「数へ日」。いよいよ詰まってきたという実感がある。あれこれと年内にすませておきたい用事があり、残された日々との競争で、今日やると予定したことは今日の分として片づけておかなければならない。

賀状書く生存証明書くごとく

坂井 博

昨年あたりから俄かに「年賀状じまい」なる言葉が聞かれるようになった。翌年以降の年賀状を辞退する旨を記して送る最後の年賀状のことだが、一年に一度もらう便りは、その方が元気であることの生存証明でもあるのだ。

# 潮鳴集

檣 灯 小林陽子

金平糖の角の鋭き湯冷めかな  
帆綱鳴るなり木枯の星空に  
星屑を集めて滝の凍てにけり  
檣灯の木枯びかりしてゐたる  
赤子泣く冬青空を引き寄せて

波のぬげ殻 木村あさ子

津軽野を平らかにして山眠る  
仮出所のやうな退院年の暮  
決心の硬さでありぬ冬木の芽  
嘶きし波のぬげ殻波の花  
冬眠の森人肌に膨らめり

神の笛 小坂尚子

茶の花も日のぬくもりを抱きけり  
鷹一羽空高ければ高みまで  
彩雲の雫をためて竜の玉  
鯨来る星ふゆる夜を悠悠と  
神の笛なら狼は眼を覚まし

百秒 道端 齊

開戦日皇帝ダリア咲いてをり  
百秒の工事信号待つ師走  
称名の声のくぐもる冬の滝  
冬銀河字画の多き漢字繰る  
待春の山羊の鳴き声道の駅

海 鼠 中村重幸

\* 浦一番無口な男海鼠突く  
大炬燵文殊の智慧の出でにけり  
急坂の海人の近道枇杷の花  
咳一つするたび過去の遠くなり  
雪の夜の夢の深さに沈まばや

オラトリオ 七田文子

オニオンスープロ尖らせて吹く寒夜  
剥製の目のてらてらと夜の凍つる  
オラトリオ降り来るやうや冬銀河  
海蝕の崖打つ怒濤紅つばき  
淡き日に光をたたむ冬薔薇

双六 大矢恒彦

\* 頬ぎゆつと膨らみジャズの冬あたたか  
年の瀬の忙しさははず腕時計  
銀座までポインセチアの赤を着て  
双六やみな遠くみて恙なく  
くろがねの富士を抱きて寒夕焼

てのひらに 本池美佐子

枯木立透けてビルの灯くらしの灯  
てのひらに陶土吸ひつく寒土用  
海みえて家族の見えて蜜柑山  
白米の艶に落して寒卵  
夕さりの鎌倉五山雪来るか

全て空 広海あぐり

\* 枯野行く風の音ほか全て空  
うたた寝も良き待春の美容室  
坂の上より狐襟巻尾を曳いて  
奥までも日を入れ京間の畳替  
数へ日の床屋の窓のうす明り

垂直に 栗坪和子

\* 垂直に寒の降り来て瑞巖寺  
インバネス津島修治は丈高し  
もう山の影が届いて水仙花  
対岸に横浜の灯やクリスマス  
聖夜劇前歯の抜けたマリアさま

# 沖作品



## 能村研三選

\*短めのことば生き生き年の市

千葉

吉村さよ子

家族欄の空白多し枇杷の花  
短日の遊びのつづき又あした  
譲られて片手を出しぬ丸火鉢  
冬籠分厚い字引どかと置き

手水舎のひしやくに雪の重さかな

青森

中谷 恭子

\*威をはりて寂しがり屋の鏡餅  
冬眠や寝息の深く埋もれたり  
福笑ひ天平美人のできあがり

初場所の栈敷の着物あざやかに

\*少しだけ負荷かけ生きむ去年今年

埼玉

有井千枝子

風花のつと消えジョーカー手の内に  
極月の大僧正の緋の衣  
迷ひ子のやうな昼月寒椿  
雨打たば尚昂るやラガーマン

\*沖見るは母恋ふに似て冬うらら

市川市

西井薫美子

水仙の海を見てゐる旅愁かな  
小春日の鳶にさらはるメロンパン  
臘梅の香るや主婦の座の古りて  
平和てふ言葉つくづく餅を焼く

晩学の道こつこつと枇杷の花

千葉

長山 正子

炭焼の煙のふもと生家見ゆ  
母の背のつの字に曲り山眠る  
数へ日や今日やることは今日の今

\*冬蜂や覚悟を決むる時り来ぬ

襲名の華やぎを着て冬め街

坂井

博

水団の日と決めし母開戦日  
凍つる手に銃持つ兵士レノンの忌  
賀状書く生存証明書くごとく  
幕間の「おせんにキャラメル」煤逃げて